

St. Luke's International University Repository

精神看護学領域の学会に関する海外の動向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): Academic Conferences in abroad, Psychiatric and Mental Health Nursing 作成者: 羽山, 由美子, 水野, 恵理子, 岡田, 佳詠, 下枝, 恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/431

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



報 告

精神看護学領域の学会に関する海外の動向

羽山由美子¹⁾ 水野恵理子¹⁾
岡田 佳詠¹⁾ 下枝 恵子¹⁾

Professional Organizations and Academic Conferences in
Psychiatric and Mental Health Nursing :
An International Perspective

Yumiko HAYAMA, R.N., D.N.Sc.¹⁾, Eriko MIZUNO, R.N, Ph.D.¹⁾,
Yoshie OKADA, R.N, M.A.¹⁾, Keiko SHIMOEDA, R.N., M.N.¹⁾

[Abstract]

This paper describes ways in which psychiatric and mental health nurses have organized professional organizations and presented academic conferences; the paper is based on our own experiences and internet search.

There are four organizations in the United States; American Psychiatric Nurses Association (APNA), Society for Education and Research in Psychiatric-Mental Health Nursing (SERPN), International Society of Psychiatric Consultation Liason Nursing (ISPCLN) and Association of Child and Adolescent Psychiatric Nurses (ACAPN). SERPN, ISPCLN and ACAPN united to establish the International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses (ISPN) in 1999. The purpose of their alliance was to increase the political power of nurses in the mental health field; However APNA still has not yet joined the alliance due to some organizational reason.

The Royal College of Nursing in the United Kingdom has been organizing two academic conferences: International Conference of the Network for Psychiatric Nursing Research (NPNR) and European Mental Health Nursing Conference, both of which have had their seventh annual meetings.

Psychiatric mental health nursing is a minor field, with smaller numbers of clinicians and researchers compared to other nursing fields. Thus, nurses in many other developed countries do not organize academic societies or even professional groups in this field. In Japan, we have the Japanese Psychiatric Nursing Association which has 30 to 40 thousand members and also the Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing. Only in Japan and the United States are there both professional and academic organizations. In Japan, it is mission of both organizations to foster international networking

1) 聖路加看護大学 精神看護学 St. Luke's College of Nursing, Psychiatric & Mental Health Nursing

2001年11月20日

受理

among psychiatric mental health nurses since our consumer group is still suffering from stigma and unequal status everywhere in the world.

〔Key words〕 psychiatric and mental health nursing, academic conferences in abroad
〔キーワード〕 精神看護学, 海外の学会動向

〔抄 録〕

海外の精神看護学分野の学会動向について、インターネット検索も交えながら、ここ数年かけて筆者らが実際に参加して把握した諸状況を報告した。アメリカには4つの団体が存在し、それらは The American Psychiatric Nurses Association (APNA), Society for Education and Reserach in Psychiatric-Mental Health Nursing (SERPN), International Socieity of Psychiatric Consultation Liason Nursing (ISPCLN), Association of Child and Adolescent Psychiatric Nurses (ACAPN) である。1999年から SERPN, ISPCLN, ACAPN が一つにまとまり、International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses (ISPN) となって年次大会も合同で開催するようになった。特徴は学術の発展とともに政策的パワーを発揮して実践の改革に取り組んでいる点である。

イギリスには独立した組織は存在しないが、Royal College of Nursing (RCN) が企画運営する学会が2つある。The Network for Psychiatric Nursing Reserach (NPNR) と、European Mental Health Nursing Conference で、どちらも7回の年次大会を迎えたところである。NPNR は国際学会であり、後者はヨーロッパ中心の会議である。その他は、単発でカンファレンスが開かれることはあっても、カナダ、オーストラリア、北欧など定期的に学会を開催している組織は見あたらなかった。

日本には、日本精神科看護技術協会と日本精神保健看護学会の2種類の団体があり、20年の学会の歴史をもつアメリカ、10年前後のイギリスとならんで、自己研鑽に励んできたことが改めて認められた。

I. はじめに

精神看護学（あるいは精神保健看護学; Psychiatric/Mental Health Nursing）は、医学と精神医学の関係がそうであるように、看護学という体系のなかではきわめて小さな分野である。それは必ずしも「重要でない」という意味ではないのだが、実践に従事する者の数、さらには科学として探求しようとする者の数が他領域に比べて圧倒的に少ない、という意味ではマイナーな領域なのである。

これは、なにも日本に限ったことではない。諸外国を見渡しても精神看護学の学術団体はきわめて限られている。日本には、日本精神科看護技術

協会（以下、日精看）という職能／学術団体があり、数万人の会員を擁して、毎年いくつかの専門分科会に分かれて学術集会を開催している。それらの分科会には精神科救急・急性期看護、思春期・青年期精神看護、精神科リハビリテーション看護、老年期精神科看護などがある。また、職能団体として、精神科看護の向上をめざした活動や、認定看護師の教育・認定なども行っている。こうした精神看護の職能団体で研究や教育に力を入れている例は、アメリカの他はほとんど耳にしたことがない。

日本精神保健看護学会（The Japan Academy of Psychiatric and Mental Health Nursing）は、職能よりは学術性に重点をおいて1991年に発

足したが、毎年学術集会を開催し、学会誌も年1回発行を継続し、その内容もかなり充実してきた。会員数はようやく500名を越えたところであるが、残念ながら日本学術会議にはまだ登録されていない。精神看護学の分野で、職能団体と学術団体が2種類あるというのは諸外国でも珍しい例である。

海外の状況はどうなっているのか、インターネットで検索してもアメリカ・イギリスを除いて、ほとんど分からないのが実状である。どうも日精看に相当する精神科看護職の専門職団体が存在するのはアメリカ・カナダの他はなさそうである。イギリスでさえ調べた限りは見あたらない。英語圏以外は、言葉の問題もあるが、フランス・ドイツ・イタリアなど団体の有無を検索したがウェブ・ページ自体が存在しないようである。北欧の状況も同じで、こちらは友人に聞いた限り、精神科看護職の職能であれ学術であれ団体・組織は存在しないとのことであった。

そこで、本論では、ここ数年かけて筆者らが実際に参加して把握した海外の精神看護学の学会動向を報告したい。

II. アメリカ合衆国

1. 学術団体

アメリカには看護職で構成され、毎年定例の学術集会を開催している精神看護学の学術団体は4団体ある。

The American Psychiatric Nurses Association (APNA; www.apna.org) は、会員数4,000人以上を有して米国内では最大規模である。会員は主として精神科臨床に従事する登録看護婦(RN)であり、学生会員や一般会員の制度もある。日本でいうと日精看に相当する職能団体であるが、インターネットによる検索では、カリフォルニア州やジョージア州など32の州に支部があり、それぞれ独立した活動をしている。筆者らは、残念ながらまだAPNA主催の学術集会には参加したことがない。

Society for Education and Research in Psychiatric-Mental Health Nursing (SERPN) は、

会名からもわかるとおり、大学教員および精神科臨床・ナーススペシャリスト(CNS)およびナース・プラクティショナー(NP)によって構成される学術団体で、1984年以来、毎年学術集会を開催している。正確な数は把握していないが、会員400-500名程度の小さな団体である。しかし、団体公認の専門誌 Archives of Psychiatric Nursing (W.B. Saunders より刊行) は、研究論文のみで編集されており精神看護学の専門誌としては他誌をぬきんで質の高い雑誌である。1987年に第1巻1号を発行し、隔月刊行、編集委員には、エール大学の Judith B. Krauss 教授が1号より継続して委員長をつとめ、主だった大学の教授クラスが名を連ねている。

SERPN のリーダーたちが数年来の念願としていたのが、APNA と他の2つの団体、リエゾン精神看護 (International Society of Psychiatric Consultation Liaison Nurses; ISPCLN) と小児思春期精神看護の団体 (Association of Child and Adolescent Psychiatric Nurses; ACAPN) を統合して一つの会にすることであった。小団体では政治的影響力がないからである。筆者は1997年11月ワシントンDCで開催された第14回大会から出席するようになったが、'98年の15回大会(シカゴ)も含めて、毎年のようにその統合にむけての戦略が討議されていた。日本では、看護の学会が急増して細分化していく動きの中で、アメリカではこのようにポリティカル・パワーを高めるために統合の動きにあることが印象的であった。

しかし、独自の活動をしている団体を統合するのは並大抵のことではない。最後まで APNA が反対で、結局、SERPN、ISPCLN および ACAPN の3団体が一つにまとまり、1999年4月に International Society of Psychiatric-Mental Health Nurses (ISPN; www.ispn-psych.org) として第1回大会をボルティモアで開催した。なぜ APNA が賛同しないのか不審ではあったが、2、3の参加者に聞いたところ、他の3団体の会員資格が大学教員もしくは CNS、NP なのに対して (大学院の学位取得者対象)、APNA の会員の大半は RN (学士もしくは準学士、

ディプロマ) だからではないかとのことであった。団体としては、APNA が4,000人以上を有するのに対して、ISPN は3団体統合しても'99年当時で800人をやや上回る程度である。APNA 独自の課題・活動を優先したのであろうと推測される。統合したからといって、SERPN や ISPCLN, ACAPN が消滅したわけではなく、分科会として今でも存続し、大会の折には必ず分科会ごとの集まりや理事会もあり、雑誌等の刊行は従来通りである。2001年4月の第3回大会(フェニックスにて)でも、APNA の代表を招待して4団体統合への動きは今もまだ継続している。ちなみに理事長(ISPN president)は3年任期だが、初代理事長はISPCLNのリーダー、Suzan Krupnik, MS, RN (リエゾン精神看護婦)であった。SERPN 会員の有名大学の教授が初代理事長になるのではなく、マサチューセッツの小さな町で臨床についている者がなるところが、日本とは異なっており、興味深いものだと感じた。

2. 学術集会の様子

筆者(Y. H)は、SERPN のときに2回、ISPN になってから2回、年次大会に参加しているが、3団体統合したからといってさほど大きく変わったという印象はない。運営方法も規模も変わらず、大体200-250名前後であろうか、ホテルを会場にしての4日間、むしろ開催地のカラーが出ることの方が大きいような印象をもっている。SERPN のときは隔年で、ISPN になってからは3年ごとにワシントン DC またはその近郊で開催されるが、他の都市での開催に比べ、やはりDCでの大会は政治色が濃くなる。とくに今年はアリゾナ州フェニックスで開かれ、土地柄のせいもあるのかのんびりした雰囲気だった。'99年のボルティモアでの大会には、アメリカ看護婦協会(ANA)会長を基調講演者の一人に招いてホワイトハウスでのロビイング活動の裏表や、国立精神保健研究所(NIMH)の政策立案担当者を招いての昨今の動向、研究基金の配分動向など、議論沸騰して会場がなかなか熱くなるのには驚いたものである。

もう一つ目に付くのは、精神科 CNS や NP は処方権をもっているので薬剤会社の進出が著しいことである。大会前日にプリ・カンファレンスがあるが、今年は複数の薬剤会社主催で、早朝から一日中、朝食・昼食付きで(食べながら聞く)、非定型抗精神病薬および第4世代の抗うつ病薬の治験報告があった。日本でも治験コーディネーターをナースが担当するようになったが、この研究発表では必ず医師とナースがペアになって、ナース・コーディネーターは堂に入った発表をしている。それ以外にも、会期中に7時から8時半まで朝食付き薬理研究のプレゼンテーションがあったり、展示も数社が出展して無料で教材ビデオや社名入り筆記具類を配っている。大会開催の経済支援をかなりしているようでもある。

プログラムは、4日間の会期中、基調講演が数名、シンポジウムとワークショップが各種、演題発表(研究、臨床実践、教育の3分野ごと)、ビジネス・ミーティング、授賞式、レセプションにディナーとある。日本と異なるのは、理事会・評議員会に相当する会や分科会ごとのビジネス・ミーティングのどれも、参加者なら自由に参加し発言できる点である。今年は、羽山、岡田、下枝の3名が日本から出席したが、こうしたラウンド・テーブルでは当然、それぞれ異なるグループに参加するので、日本の事情など答えられるように準備しておく必要がある。参加者の約2割が海外からで、アメリカ人パワーに圧倒されることもあるが、ホテルでの缶詰状態では、言葉の問題は抜きにして否応なく交流せざるを得ない状況が続く。そうした中で、例えば、今年は英国のオックスフォードにある Royal College of Nursing の研究所で働く Dr. Julia Jones と親しくなり、9月の英国の学会参加の折には水野と下枝の両名は、彼女の計らいでオックスフォード市内の精神保健施設の見学が可能となった。

研究テーマの動向は、一概にまとめにくいですが、リサーチ部門では大脳研究の進歩と精神力動のリンクエージ探索や、各種依存症、今年はとくに ADHD (注意欠陥多動症) や複数診断の併病(comorbidity)対策、うつ病、グラウンディッド・

セオリー・リサーチや現象学研究などが目に付くところだろうか。教育部門では、一昨年までは、修士課程のカリキュラムにおけるCNSとNPトラックの統合、精神科NPはフィジカルアセスメントも必要になるのでどのように精神医学知識の学習に身体管理を組み込むかといったテーマ、ビデオを使っての面接技術の教育技法の開発など、いい研究が目立った。臨床部門では、伝統的な隔離抑制などに関するテーマの他に、広大な土地柄でテレ・ヘルスやインターネットを用いた臨床実践などが印象深い。

総じて、SERPN, ISPN とも、参加者は日本の精神保健看護学会よりも小規模ではあるが、演題発表やシンポジウム・ワークショップのどれも質の高い内容が盛り沢山で、参加しての満足度は高い。また、日本からは例年、筆者らだけなのだが、単独で参加した場合でも、いつの間にか集まりの一部に組み込まれるような熱気がある。来年は、ワシントンDCで第4回大会が4月24～27日に予定されており、「アクション、アドボカシー、アドベンチャー」と政治と政策に関するメインテーマで、大いに期待される。

Ⅲ. イギリス

イギリスには英国看護協会 (Royal College of Nursing; RCN) があり、30数万人の会員を有して、種々の協会活動のなかでも、とりわけ教育プログラム・研究集会の多彩な提供が特徴的である。精神科看護職のみの職能団体、または独立した学会というものはなく、RCNが精神科看護職のためのカンファレンス等を企画運営している。

The Network for Psychiatric Nursing Research (NPNR) のことを知ったのは、2000年2月、突如届いたe-mailからであった。SERPNの大会で出会ったMartin Wald, RN, PhDと名刺交換をしており、RCNで精神科看護の研究や教育を担当していた彼が、第6回大会から国際的な会にしたいのでぜひ参加をという呼びかけであった。ちょうど修士論文の審査が終了した頃であり、加賀谷聡子さん(2000年3月修了)が発表を希望

したので、2人でそれぞれに抄録を送った。9月下旬、幸い、大学院入試日程に重ならず、当時は研究生であった岡田と3名での参加となった。2001年第7回大会は、ミセス・セントジョン基金を受けた水野と下枝の2名に、院生の小松容子さんの3名が参加した(水野は東京医科歯科大のときに行った研究を発表)。

NPNR 精神科看護研究学会は、オックスフォード大学のカレッジ群のなかの聖クロス・ビルディングで、毎年9月末の3日間の会期で開催される。イギリス人の常連参加者にとっては年1回集まって情報交換と交流をするアットホームな機会である。参加は200名前後であろうか、今年はとくに海外からの参加者が増えて、7割が英国、その他は北欧が多くデンマーク、ノルウェー、フィンランド、それにイタリア、南アフリカ、イラン、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどからである。

基調講演が数題、スキル・ワークショップ(触法患者のケアにおけるクリティカル・インシデント、クリティカル・アプレイザル技法、出版のための執筆、他)、それから、今年はとくに若い参加者向けに初日の最初のプログラムで「ナーバス・プレゼンターのための対処」というのがあった。参加者は圧倒的に臨床家が多いので、演題発表は触法精神疾患患者のケア、暴力・興奮を呈する患者のケア、強制入院患者の人権擁護、認知行動療法による介入研究、児童虐待への看護介入、家族や介護者へのケア、精神看護者のための教育プログラムの実践と評価など臨床テーマが多岐にわたっている。

NPNR 大会の特徴でもう一つ付け加えるとすれば、2日目の夜のバンケット(晩餐会というほど大仰ではないが)であろうか。中世の趣を残した聖キャサリン・カレッジの天井の高いダイニング・ホールで、200余名が一斉にテーブルにつき3時間近くかけて歓談しながらゆっくりした食事をするのである(スピーチや儀式はなにもない)。参加者のネットワークづくりを大事にしており、年4回発行の「NetLink」という小冊子もあるが、こうした場での交流が一層重要となる。第6回、第7回の参加を通じて、羽山や水野は帰国後に、

会で親しくなった参加者から本や雑誌の原稿依頼などを受け、さらに海外との交流を動機づけられるようになっていく。

IV. その他

筆者らはまだ参加したことはないが、ヨーロッパ精神保健看護会議（European Mental Health Nursing Conference）というものもある。RCN の主催によるものだが、第 6 回は 2001 年 3 月に英国グラスゴー市で、第 7 回はデンマーク看護協会との共同開催で 2002 年 2 月 15-16 日にコペンハーゲンで予定されている。プログラムを見ると、こちらも北欧、とくにフィンランドからの発表者が多く、トゥルク大学の友人から以前に北欧で開催されたときに参加を誘われたことがある。これまでの動向や会の内容はやはり出席してみないとわからない。

カナダには、Saskatchewan 州、Manitoba 州、Alberta 州に登録精神科看護婦の団体があるが、ガイドライン作成、免許、奨学金、その他情報提供が主体で、学術集会の開催はしていない。コンサルティング会社が、Psychiatric Nursing in Canada というウェブ・ページを開いてリンクを貼っているが、こちらも主に情報提供主体であって組織化されているわけではない。オーストラリアも英語圏ながら、インターネット検索で職能／学術団体の存在がみつからなかった。ヤフーのアジア圏検索でも、同様にみつからなかった。

ただし、個人的な伝で、アジア精神看護学学会（仮称）が準備中であることを最近になって e-mail で知った。三重県立看護大学の川野雅資先生、ハワイ大学およびタイの Chulalongkorn 大学のファカルティが共同で立ち上げの準備中で、2003 年 1 月 29-31 日に第 1 回学術大会（バンコクにて）が計画されている。この会が順調に育つと、ヨーロッパ精神保健看護会議に次いで、アジア地区の会に発展する可能性がある。とくにアジアは、タイ、マレーシア、香港、韓国、台湾、フィリピン、インドと英語でのコミュニケーションが普及しているので可能性がある。アジアの精神医療は

障害者の人権問題も含めて、まだまだ開発の遅れが目立つ分野であるので、この会の発展が大いに期待される。

看護だけに限らなければ、国際レベルの活動はこの 20-30 年の間にかなりの進展があった。世界精神保健連盟（World Federation for Mental Health; WFMH）は、2 年ごとに世界会議を開催しているが、1993 年に日本で開催された（通称、幕張会議と呼ばれている）。WFMH の特徴は、専門家集団だけでなく当事者団体の世界的連帯をも促進している点である。世界精神医学会（World Psychiatric Association; WPA）は来年、アジアでは初めて、日本で第 12 回大会を横浜で開催する。日精看が企画運営に参画しているので、看護職の交流もみられるであろう。

V. おわりに

精神看護学は洋の東西を問わず、まだまだ発展途上の初段階にある。精神科医療は、政治や経済、マクロ政策の影響を受けやすく、どこの国でも従事者は制度のはざまでフラストレーションを感じている。精神障害者の人権は、国レベルで比較すればこの 30 年あまりの間に格差は広がるばかりであるが、40 年前は欧米でも州立精神病院の巨大施設で収容中心の処遇であった。英・米・北欧と、他方で韓国・台湾・エジプトといろいろな国々の精神科医療施設を巡り、看護職との交流をもってきたが、それぞれの国柄に応じた発展段階があることがわかる。

今回、精神看護学の海外の学会動向を紹介したいと思い、筆者らが実際に参加して把握した状況を、アメリカの SERPN, ISPN, イギリスの NPNR を中心にまとめてみた。アメリカでも 20 年、イギリス・日本でかれこれ 10 年前後の学術集会の歴史である。こうして振り返ってみると、日本の精神科看護職は、自己研鑽に関しては、欧米の動向と照らしても恥ずかしくない努力をしてきたのだということを改めて認識した。しかし、自己研鑽の努力が、制度や政策というマクロなレベルへ影響するだけの力になりにくいこと、また新

たな知の生産につながりにくいのはどうしてだろうかと、結局のところ自らを振り返る起点に戻ってしまった。小さな分野であるだけに、これから

も海外との交流をより一層深めていきたい。世界精神医学会議があるのだから、いずれは世界精神看護学会議への発展にもつながるであろう。
